

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察

椎
木
哲
雄

四、元の延祐本と至正版
五、四部叢刊所収本

六、おわりに

一、はじめに

昭和四十八年五月、本研究所の田島所長以下、鈴木哲雄を含む所員四名は、研究調査の一環として、宮内庁書陵部の禅籍調査を行なった。この際、所外から椎名宏雄が同行したのを機会に、四十九年五月には、鈴木・椎名の両名が、宮内庁・内閣文庫・浅草寺等に所蔵する『景德伝燈錄』を調査した。本稿は、これに加えて、椎名が東洋文庫・大東急記念文庫・金沢文庫・東北大学等に所蔵する同書を調査した結果と、『四部叢刊』『中華大藏經』所収の影印本の調査とを加えて、その書誌的外面的考察をまとめたものである。各関係機関および協力をえた方々に対し、あらためて甚深なる謝意を表するしだいである。

一、はじめに

『景德伝燈錄』三十巻は、景德元年（一〇〇四）、道原による上進の後、まもなく入藏（大中祥符四年—一〇一一）せられ、また印刻に付された。以後、朝鮮や日本を含めて、宋代以降のはとんどの大藏經に入藏し、また幾多の単行の歴史をもつ。それは、数ある禅籍の中でも白眉といつてよく、まさに本書の地位を物語るものである。しかるに、古刊禅籍に共通な現象とはいえ、この多彩な開版の歴史にも

二、宮内庁宋版一切經所収本
三、中華大藏經所収本

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

かわらず、本書のテキストそのものの文献的書誌的究明は、いまだ緒についたばかりである。⁽¹⁾ かの一代の碩学、無著道忠（一六五三—一七四四）すらも、本書の異版に関する研究を遺さない。⁽²⁾ 本書が広範であることもさることながら、古くから入蔵という栄誉と権威とを与えられた禅録のもつ不可思議の力のゆえであろうか。

大正藏經が本書を収録するに際して、元代の延祐版を底本とする縮蔵本をとったのはともかく、明本系の正蔵本でこれを対校したことは、別系統の代表的異版によつたといふ意味で評価されるべきである。しかし、すでに数本の宋・元版が知られる現在、大正藏經本をもつて本書の定本とすることは到底許されない。それは、四部叢刊本を無批判に宋版として用いるべきでないことと理由は同じである。異版中、随所に存する本文内容の相違は、本書を重視すればするほど、一層究明されなければならない。本書の原型はいかなるものであり、それが、いつ、なにゆえに変型するのか。このような内容研究を進めるためにも、まず、古版の書誌的外的考察が先行されなければならない。本稿において、これまでに調査しえた本書の書誌的考察を、ここに試みようとする意図は、まさしくここにある。

かつては筆者も、本書の異版について考察したことがある。⁽³⁾ しかし、その後の未知の文献資料の調査検討の結果、すでに訂正を要する記事すくなからぬことを感じる。ただ、本稿は共著という形でもあるため、前言の訂正は本稿の論旨をもつてそれに代え、一々ことわらぬことをお許しいただきたい。

(1) 陳垣氏『中国仏教史籍概論』（一九六二、中華書局刊）が近年ではこの問題にふれる最初であろう。

(2) 未刊の写本『景德伝燈錄校解』『五燈剔臺』とともに、すぐれた涉典録であるが、異版についてはほとんど関説しない。

(3) 鈴木「景德伝燈錄の割注について」（『宗学研究』第十三号）、「景德伝燈錄に内在する史的な流れ」（『愛知学院大学文学部紀要』第一号）、椎名「景德伝燈錄抄註について」（『印度学仏教学研究』第二十一卷第二号）

二、宮内庁宋版一切經所収本

宮内庁書陵部の宋版一切經中に、『景德伝燈錄』（以下『景德』と略称）が存在することは、すでに『昭和法寶総目録』第一巻所収の『宮内省図書寮一切經目録』中に、ここに試みようとする意図は、まさしくここにある。

燈錄第一

景德傳燈錄卷第一

僧道原纂

振

七佛天竺祖師

毗婆尸佛

尸棄佛

毗舍浮佛

拘留孫佛

拘那含牛尼佛

迦葉佛

釋迦牟尼佛

天竺十五祖

內一祖

旁出

第一祖摩訶迦葉

方出

第三祖商那和修

田底也

第五祖提多迦

第六祖彌迦迦

第七祖婆須蜜

第八祖佛陀難提

第九祖伏闍羅多

第十祖恥尊者

第十一祖富那夜奢

第十二祖馬鳴大士

七

福州版『景德傳燈錄』卷一部（宮内厅書陵部所藏）

さて、書陵部の『景德』をみるに、目録とほぼ同じく、
同目録の内題の次に、「北宋板開元寺本にして、其の欠く
所の本を東禪等覚院を以て之を補う」⁽²⁾と注記することく、
いわゆる福州版の開元寺・東禪等覚院両本の混合蔵であ
り、個々の經論等がいずれの版に属するかは、今後の検討
にまつものが少くない。⁽³⁾『景德』に関しても、事情はま
つたく同じである。

さて、書陵部の『景德』をみるに、目録とほぼ同じく、
同目録の内題の次に、「北宋板開元寺本にして、其の欠く
所の本を東禪等覚院を以て之を補う」⁽²⁾と注記することく、
いわゆる福州版の開元寺・東禪等覚院両本の混合蔵であ
り、個々の經論等がいずれの版に属するかは、今後の検討
にまつものが少くない。⁽³⁾『景德』に関しても、事情はま
つたく同じである。

さて、書陵部の『景德』をみるに、目録とほぼ同じく、
同目録の内題の次に、「北宋板開元寺本にして、其の欠く
所の本を東禪等覚院を以て之を補う」⁽²⁾と注記することく、
いわゆる福州版の開元寺・東禪等覚院両本の混合蔵であ
り、個々の經論等がいずれの版に属するかは、今後の検討
にまつものが少くない。⁽³⁾『景德』に関しても、事情はま
つたく同じである。

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

八センチ、天部欄外六・二センチ、地部二・〇~一・五センチ。毎紙の中央に函名・巻数・丁数・刻工名等を記入する。料紙は厚手の黄色の紙で、文字は鮮明である。

この『景德』は、われわれが大正蔵経本によつてなじみ深い楊億の序文をはじめ、すべての序跋をもたぬ。また、卷頭の西來年表も存在しない。代りに、正蔵本にはない本文字句の音釈が字函ごとにまとめられ、三帖を存することが本書の特徴である。かかる外見的な特徴は、あたかも正蔵本が対校に用いる明本系『景德』のそれに等しいことに注目される。題記・刊行年記の類は、遺憾ながらまったくみられない。ただ、巻十の巻首と巻末に細字で二行にわたり、

大莊嚴寺僧祖諱拾錢開經／一函追薦考妣超生淨界者

なる募縁者の刻記がみえ、振字函の十巻は祖諱の施印なることを知らしめる。しかし、大莊嚴寺は『重纂福建通志』全二七八巻中に記載なく、おそらく福建以外の寺名であるが、目下のところ、祖諱の名ともども明らかにしえない。

ところで、一方、横浜市の金沢文庫にも宋版一切が所蔵される。これまた、書陵部と同じく東禪院・開元寺両版の混合蔵経といわれるが、就中『景德』のマイクロ写真が駒

沢大学図書館に蔵され、調査を容易ならしめている。

この『景德』は、惜しむらくは破損がいちじるしく、全体の約二〇%ほどを欠く。いま、現存する巻を示せば、全

振字　卷一、五、六、七、十、及び音釈（首欠）
纓字　卷十一（尾欠）、十二（首欠）、十三、十四、十五、十六、十七、十八（尾欠）、十九、二十（中欠）、及

び音釈

世字　卷二十一、二十二、二十三、二十五、二十六、

二十八、三十

のごとくである。ところで、この金沢文庫本と書陵部本とを照合の結果、両者は完全に一致する。すなわち、この両者は同一版の宋槧折帖にほかならぬことが判明する。しからば、この福州版大蔵経の『景德』は、いittai 東禪院・開元寺のうちの、いずれの開版であろうか。

いま、『東寺經藏一切經目録』によれば、東寺の一切経は北宋版東禪等覚院本で、欠巻を開元寺本で補うとされるが、就中、『景德』は、

振字　自卷第一
至卷第十一
纓字　自卷第十
至第二十一
元豐三年刊
乃至第十一第十二無刊記
卷第十三
元豐三年刊
乃至第二十元豐三年刊
附音釈一帖

世字　自卷第二十一
至卷三十二
元豐五年刊
附音釈一帖

一帙
二帙
三帙

と記され⁽⁵⁾、元豊三年（一〇八〇）より同五年（一〇八二）に至る間の印刻なることが知られる。

しかるに一方、『高野山見存藏經目録』所収の「勸学院藏宋版一切經目録」によれば、

| | (卷目) | (冊數) | (刀工名) | (印造銘) |
|---|-------|--------|---------------------|----------------|
| 振 | 景德伝燈錄 | 一～一〇一〇 | 付言一 | 王興一～一〇 |
| 纓 | 同 | 一一一〇一〇 | 吳成一、丁紹一四、 李蕙一～一六 | 辛中八八、 王佑二〇 |
| 世 | 同 | 一一三〇一〇 | 張義一七 陳仲二～三〇 | 張義一七 陳仲二～三〇 |

とあり、同じく「宋版刊記奥書目録」によれば、卷一より

卷二十の巻首には、
福州東禪等覺院住持慧空大師沖真、於元豐三年庚申歲、謹募衆
緣開大藏經印板一副、上祝今上皇帝聖壽無窮國泰民安、法輪常
轉

とみえ、また、卷二十七の巻首には「同五年」とあるとい
う。⁽⁷⁾ 右の記載により、高野山本も東寺本と同一版なること
が知られるが、音釈の存否が不明である。ただ、右の勸学
院所蔵宋版一切經は、大部分が六行十七字の一定した版式
と首書刊記を有するとされるものの、音釈に関する記載は
まったく存しないから、『景德』の場合も例外ではなく、
音釈は対象外とされているようである。刀工（刻工）銘が

少ない事にも驚かさる。

ittai 東禪等覺院（後に東禪寺と改称）版の大藏經は、崇寧万寿大藏の賜号をえて元豊三年ごろに開刻し、政和二年（一一一二）に完成する。一方、この完成の年に始まつた開元寺版の雕造は、毘盧大藏の名のもとに紹興二十一年（一一五二）に完成をみる。⁽⁸⁾ したがつて、筆者はいまだ東寺や高野山の該書を見る機会をえないが、右の記載を信すれば、これらの『景德』は最も初期の東禪等覺院版にほかなりぬ。とすれば、無刊記で大部分の刻工名を異なる書陵部本は、これとは異版といわなければならない。しかばねは開元寺版か。が、それもにわかに決められぬ。何となれば、前述のごとく、書陵部本の版式は一紙三十六行で各函字ごとに音釈が付されるが、これらの特徴は東禪寺版の一般的特徴に等しく、一紙三十行で音釈不存とされる開元寺版とは、まさしく相反する。

のみならず、書陵部本にみられる刻工名中、東禪寺版の他の経帖中のそれと一致する事実がある。いま、煩瑣にわたるが、書陵部本『景德』中、調査できた巻の判読可能な刻工名を参考までに掲げよう。

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

仗生、林安、仗伸、(卷四) 王与、達、高元、亨、花、和、元、
 元、(卷五) 志、林志、仗生、仗伸、元、程亨、老、才、元、(卷六) 仗伸、林尚、亨、林才、林女、元、王大、(卷七)
 林才、元、花、仗生、保、(卷十) 英、仗生、老、林安、元、(卷十二) 仕、和、亨、付言、正、元、仕、知正、(卷
 十二) 元、閔、王仕、志、仙、(卷十三) 正、林、王仕、仗伸、王与、生、元、(卷十四) 王仕、浩、花、李和、(卷十五)
 鍾玉、伸、王仕、林安、(卷十六) 王仕、先、言、李和、
 伸、主賀、(卷十七) 王仕、玉、林安、(卷十八) 仗伸、花仙、王浩、(卷十九) 仗生、玉、林安、(卷二十) 元、王仕、
 郭了、仗伸、英、(卷二十一) 文、林受、玉、知正、王伸、
 高宏、安、(卷二十二) 英、仙、(卷二十三) 先、元、王和、
 選、玉、林明、林文、(卷二十五) 高元、仗生、楊老、文、
 宏、元、玉、仙、王和、仁、仕、(卷二十六) 宏、王和、從、
 仗、生、俊、后、王仕、(卷二十八) 広、先、木、明、知求、
 仗、生、林受、厚、仕、從、(卷三十) 林用、知求、了、選、
 賜、木、王和、廣、仁、付言、元、(世字音釋) 知求、

右の刻工名を、書陵部の一切経中、あきらかに東禪等覺院版の刊記をもつ『摩訶般若波羅蜜經』三十巻、『大般涅槃經』四十巻、『華嚴經』八十巻、の中に見出される刻工名のプリント資料に徴すると、元・文・安・宏・老・志・求・英・広・俊・賜・明・付言・林安・林明・知求などの共通名がみられる。もとより、同一刻工名による印刻原文相互の照合比較を経ぬままの軽率な推定は避けねばならぬが、右の刻工中、付言や知求などの特殊と思われる名称が共通する事実をどうみたらよいか。おそらくは、東禪寺版の『摩訶般若波羅蜜經』等と本『景德』の雕造とには、同じ刻工が若干從事したことを物語るものではないかと思われる。いずれにしても、書陵部本の『景德』は開元寺版とはみなし難い。しかば、元豊版の東禪寺本との関係はどうなるのか。もとより、高野山や東寺所蔵の該書、および他の確実な開元寺版をみると、これらの疑問は氷解するであろうが、現在では、書陵部本は元豊版の補刻版と考へておきたい。

ともあれ、書陵部本の完全保存は貴重であり、筆者の閲した現存唯一の宋版完本として、今後の研究に大きく益するものである。ちなみに、『禪籍目録』が掲げる内閣文庫所蔵の万曆三十四年(一六〇六)版の八冊本『景德』とは、調査の結果、怪山寂照庵刊行のいわゆる方冊の明藏本にはかならぬが、この明藏本『景德』も序跋や西來年表をもた

ずには音訛を有する点で、書陵部本とまったく同じ体裁をもつ。おそらく、古型をとどめるものである。

『昭和法寶總目錄』1-786a

『同右』1-759a

(3) 書陵部調査室の嗣永芳照氏の御教示によれば、本邦の唐本一切經に共通な」とく、書陵部の宋版一切經も、欠本の補充は無定見になされているという。

(4) 大藏經会編『大藏經-成立と変遷-』P53~54

『昭和法寶總目錄』1-818C

(5) 水原堯栄『高野山見存藏經目錄』P258

(6) 同 P251~3

(7) (8)、(9) 前掲『大藏經-成立と変遷-』第九章、福州版崇寧万寿藏と毘盧藏 参照。

(10) 嗣永芳照氏作成の資料による。

III、中華大藏經所収本

『中華大藏經』中に積砂版の『景德』の影印が収録されている」とは、案外一般に知られていない。いったい積砂版とは、江南の陳湖磧砂の延聖禪院で南宋の中期に雕造を始め、中断などの後、元代の追雕を経て、大德十一年（一

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

1107）から延祐二年（1315）に完雕をみた。知る」とく、西安の臥龍寺と開元寺、山西太原の崇善寺等より全藏が発見されている。⁽¹⁾

民国五十四年（一九六五）、中華大藏經会印行の『中華大藏經』は、その第一輯第九集に前述の書陵部本と同じ振・纓・世の函号をもつ『景德』三十巻を影印する。もつとも、この積砂藏經全体には欠巻欠丁がかなりあるらしく、それらの部分は他の大藏經で補充している。『景德』についても同様で、各所に異版を含む。これらの異版による補充箇所は、第一輯に附録する『補頁表』に明示される。

いま、この『補頁表』にもとづき、砂積版『景德』の補充箇所とその異版名を、第一輯の通巻頁によつて示そう。

卷一（全巻）

二八七〇七a~c、二八七〇八c~10b、
二八七一a~12a（以上永樂版、北平松

坡図書館蔵）二八七〇八a~b、二八七一〇
c（以上普寧版、晋城青蓮寺蔵）

卷八（末尾）二八七五八a~九b（普寧版、青蓮寺蔵）

卷十一（首部）二八七八〇b、（中間~末尾）二八七八三
a~八c、二八七八九a~九c、（以上永樂

版、陝西第一図書館蔵）

卷十五（中間）二八八〇六c~一二b（永樂版、松坡図書館
蔵）

宋・元版『景德伝燈録』の書誌的考察（椎名）

- 卷十七 (全巻) 二八八二〇c ~ 二九b (同)
卷十八 (全巻) 二八八二九c ~ 三八b (普寧版、青蓮寺藏)
卷十九 (全巻) 二八八三八c ~ 四五b (永樂版、松坡図書
館藏)

- 卷二十六 (中間) 二八九一〇a (同)

- 卷二十七 (大半) 二八九一〇b ~ c、一四b ~ 一五a、一六a

~ 一八a (以上、同) 二八九一~a ~ 一四
a、一五b ~ c (以上普寧版、青蓮寺藏)

- 卷二十九 (首部) 二八九二八c (永樂版、陝西第一図書館藏)

- 卷三十 (全巻) 二八九三五b ~ 四三a (普寧版、雲南昆華
図書館藏)

右の補巻中、普寧版とは、元代に杭州白雲宗南山大普寧
寺刊行の、いわゆる元版大藏經であり、永樂版とは、明の

勅版大藏經中の北藏版である。磧砂版『景德』の欠巻を、
なにゆえこの両版で、しかも各地の所蔵書で補充したかは
不明であるが、いわば寄せ集めの『景德』の感じはまぬが
れぬ。ただし、版式を精査すると、これら三つの異版は、
すべて一紙三十行、一行十七字、刻工名をとどめぬ点で完

全に一致する。序跋なく、西來年表も存しない。音釈は巻

一を除いて全巻に付せられる。また、巻一の末尾は永樂版
であるが、同じ永樂版の巻末でも巻十七と巻十九には音釈

を存し、なぜ巻一のみがないのか不可解である。あるいは
松坡図書館藏の原本において、この部分のみ欠紙となつて
いたのであろうか。

さて、以上の異版を除く磧砂版本來の残存巻名は、

卷二~七、八 (尾欠)、九~十一、十二 (首尾欠)、十三~
十四、十五 (尾欠)、十六、二十一~二十五、二十六 (中間
欠)、二十七 (断簡のみ存)、二十八、二十九 (首欠)

であることが判明する。近年、台灣の真善美社刊行の『景德』が校合に用いる「宋磧砂藏本」とは、まさしく右の残
巻部分を指すものにほかならない。

この磧砂版には、巻十一と巻十四の巻末に、それぞれ次
の刊記を遺存する。

平江路萬寿禪寺淨比丘^{惟一}謹發誠心回施淨資及募 / 縁恭入
(^{マヤ}) 磧沙延聖寺大藏經局刊雕 / 仏祖伝燈三十巻永遠流通仰願 /
般若大智光明遍曠十方盡虛空遍法界乃至微塵刹土凡是有情 /
遇斯光者一聞千悟獲大懶持發菩提心永無退転四恩等報三有 /
普賢法海冤親同圓種智者 / 大德十年三月 日 比丘^{惟一}謹願
(巻十一~28780a)

平江路在城月林庵昌院主捨中絲鈔三定刊雕經三卷上根 /
四恩下資三有 / 大德十年七月初一日意 (巻十四~28804b)

右の刊記により、本版は元の大德十年(1306)といふ、

磧砂版として追雕せられたものである。あたかも、延祐三
年（一三一六）の湖州道場本に先だつ」と十年ほどである。

序跋や西来年表の存否は、卷一と卷三十は欠巻のために明
らかにしえないが、書陵部本と一致する音釈を存し、延祐
版に現われる古版に関する注記をもたぬ点で、本版も東禪
寺版系統の古型をとどめるものである。なお、卷六・十一
・二十三の各巻末に存する「弟子陳道厚書」「比丘寿介敬
書」「比丘若珍敬書」等の文字は、あるいは版下筆者の署
名を刻するものなどであろうか。

ちなみに、本書卷三十は普寧版による補巻であるが、そ
の巻末に次の刊記をとどめる。

杭州路南山大普寧寺伏承／当寺比丘明月發心施財入大藏經局刊
／伝燈錄第九卷至十卷所集／殊利專為祝扶／父親施忠信母
親潘氏二娘子辛亥癸卯各位本命星天資陪／福筭所異現生之内
福壽康寧他報之中解脱自在者／泰定元年八月 日 当山住持
明實謹題

右により、南山大普寧寺大藏經の『景德』は、その本藏の
完成（一一九〇）の雕補として泰定元年（一三一四）のころ
に施印されてゐることが知られる。

(1) 前掲『大藏經』第十二章、元版、杭州版と磧砂藏 參照。

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

四、元の延祐本と刻出版

順序からすれば、ここに四部叢刊本を考えるべきである
が、四部本を知るためにには、実は元代の延祐版・至正版に
関する考察が先行する。周知のとおり、延祐本は縮蔵本や
大正藏經本が底本とするためか、近年ほとんど注意され
ぬ。しかし、『景德』の古版の中ではすこぶる主要な地位
にあり、その原本の調査はきわめて重要である。

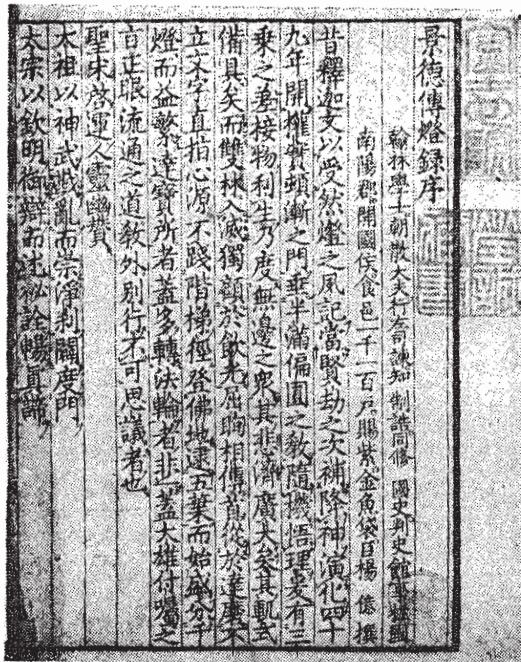
現在、東洋文庫に所蔵される本版は、旧岩崎文庫本であ
り、全十冊が桐箱に収められる。各冊に「金地院」
「瑩誠藏書」の朱印が押され、第一冊の表紙には次の識語
がみえる。

此本、伝燈錄第二板而、本朝伝來之最初本也。読晏乾峰真跡跋
文、可以知也。雖云元版距宋不遠、延祐三丙辰、趙孟頫為翰林
學士年也。蓋此本筆工子昂派人而、為宋人不待論也。余受之於
先師可庭老人珍藏。

時明治十七年

金地副住子順恭謹誌

右に云う晏乾峰の真跡跋文とは、巻末の裏扉の表に墨書き
される識語を指すが、これは本邦の貞和四年（一三四八）建
仁寺天潤庵刊行五山版の巻末に刻される南禪寺乾峰士疊の



延祐三年版『景德伝燈錄』首部（東洋文庫所蔵）

刊語なるもので、決して真跡ではない。この識語は、更に東洋文庫本の巻末裏表紙の裏に存する大用宗任の幹縁識語の墨書とともに、本書が南禅寺金地院に叢藏されていた際に、たれかが五山版から謄写したものであろう。

本書のほとんどの巻末に存する刊記は、いずれも本書に附録される希渭等の「重刊景德伝燈錄状」を簡略にした内容である。これらにより、本書は延祐三年（一二一六）、湖州道場山護聖萬歲禪寺の耆旧僧希渭が、天聖禪寺松廬和尚の所蔵する廬山穩庵の古冊を得て重刊したものである。廬山穩庵の古冊なるものがいかなる宋槧本であるかは不明であるが、この延祐本は巻末に鄭昂の紹興二年（一一三二）と劉斐の同四年（一一三四）の、ともに再刊の跋文を收めるから、このうちのいずれかの刊本をいうのである。

さて、本書の表紙は鮮かな朱肉色、縦二九・九センチ、横一九・九センチの大版で、原装と思われる。本文は鮮明で総裏打が施され、保存良好の美本である。毎半葉十三行、毎行二十二～四字、有界、左右双辺、匡郭内二一・八×一五・二センチ。版心は天地双行で、天部には一紙ごとの刻字数、地部には刻工名を記し、上部魚尾下に「伝第（巻数）」、下部魚尾下に丁数を記する。全冊に朱墨加点がなさ

れ、また和訓送りがなが付せられている。

本書の構成順序と紙数を示すと、次のとおりである。

と、前述のことくである。

右のことく、延祐本は『景德』に関する従前の序跋等を

多く所収することに一つの特長がある。同じ意図は本文内

容に関しても窺えるが、編者の良心は多く集めることをも

つてよしとするのみで、無批判な改変は好まなかつたらし

い。序跋等の順序も雑然として未整理であり、かえつて素

朴である。しかるに、本版は音釈をもたぬ。このことは、

本版の底本たる廬山穂庵本が、音釈を有する東禪院版大藏

經とは異なる系統の宋槧たることを示唆するものである。

ところで、右に掲げた本版の構成順序を大正藏經本と比

較すると、後者では 192345786 の順となつてお

りかなり異なる。大正藏經本は縮藏本と全同である。ゆえ

に、縮藏本はすでに元版の忠実な印刻ではない。

ところで、『景德』の本邦最古の刊本は、前述のことく

貞和四年（一三四八）東山建仁寺天潤菴刊行の五山版であ

るが、右の延祐版の覆刻にほかならない。⁽²⁾筆者の閲覧した

東北大本は、貞和四年の刊記とともに、その原本たる延祐

重刊の刻記を隨處にとどめる。本書は数ある五山版中、ご

く稀な粘葉装の原装を有し、その本文各所に存する宝曇に

より詳細な書入れともども、きわめて価値ある覆元版であ

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

3 2 1 楊億の序 西來年表

二紙

八紙

卷一（一四紙）、二（一六）、三（一六）、四（二四）
五（一四）、六（一四）、七（一三）、八（一八）、
九（一一）、十（一九）、十一（一八）、十二（一四）、
十三（一九）、十四（一一）、十五（一一〇）、十六（一
九）、十七（一一四）、十八（一一三）、十九（一八）、
二十（一二四）、二十一（一一三）、二十二（一九）、二
十三（一二四）、二十四（一一五）、二十五（一七）、二
十六（二九）、二十七（一九）、二十八（一六）、二
十九（一九）、三十（一八）

楊億の書、及び語錄

三紙

延祐三年（一三一六）の刊記

一紙

劉栢仲忱の紹興四年（一一三四）重刊の後序

一紙

長樂鄭昂の紹興二年（一一三二）再刊の跋

二紙

天童宏智の疏

一紙

希渭等の延祐三年重刊の状

一紙

なお、これに続き、土曇と宗任の識語が謄写されているこ

る。

さて一方、東京の浅草寺には、国的重要文化財に指定される元版大藏經を所蔵する。この大藏經は、すでに同寺刊行の『寶藏門建立誌』中に詳述されることく南山大普寧寺

版であるが、就中、第百六十八番の函号を有し振・纓・世字に配せられる『景德』は、全藏中ごく稀な延祐三年刊の異版なりとある。筆者は幸にも実物を閲覧する機会をえたが、はたせるかな、本帖は延祐版の改装本であった。

すなわち、本帖は普寧版の該書が欠巻となつたため、延祐本を横につづり合わせ、普寧版の大きさの折本仕立てとしたものである。その改装の時期は、本帖の第十巻と第二十巻の裏表紙の裏に、

永享六年甲寅六月上旬、為薄様之間、令伺申社／定打裏訖 珍譽とある識語により、永享六年（一四三四）より以前で、かなり早い時期に属することが知られる。ところで、本帖の順序も延祐版とは異なり、129345786となつている。しかも、3の本文第一巻の首部一紙と9の希渭の状とが入れ代っている。この錯簡は、折本に改装された際に順序を誤つたためであろう。

次に、至正版について報告しておきたい。

大東急記念文庫に至正二十五年（一三六五）刊行の『景德十五冊』が存することは、『大東急記念文庫所蔵貴重書解題』の唐本・朝鮮本之部に次のとおりに記される。

元至正二十五年刊。宋道元編。^{（原カ）}三十巻。左右双边、每半葉有界十三行二十三字。匡郭内、縱七寸一分、横五寸。版心「伝第（卷數）〔子數〕」。全巻に宝町期の訓点並びに注記書入があり、

卷十の首一葉・卷二十全巻・卷二十六の目一葉・卷二十九の第三葉・後序は宝町中期の補写にかかり、卷末の寛文十二年の呆快の跋文によると、呆快が修理の際若干補写している部分（第一卷末等）がある。卷二・四・六・八・九・十・十一・（卷十二は損傷にて缺）・十三（卷十四は助縁刊記の一部分の外に刷出さず。）十五・十六・十七・二十二・二十三・二十五・（卷二十七も卷四と同じ）二十八・二十九の末に、「至正乙巳宝生募緣重刊（卷十七は「前略」、卷該刊於名山祇桓精舍流通」の木記があり、又、序の末に「王允元刊」）

卷二十二の末に「四明蔣子寧刊」、卷二十八の末に「明州在城蔣子寧刊」の刊記があり、又各巻末には助縁者名の附刻がある。本書は極めて摺刷よく、初印本である。江戸極初期の茶色表紙を存し、裏打補修。大いさ、縱九寸九分五厘、横四寸八分。

右の解説では不明な全体の構成順序は、前掲延祐本の番号で示すと、1234569となる。就中、5以下は補写

で、7鄭昂の跋と8宏智の疏はまったく存しない。いったい、本書は十五冊仕立てでこそあれ、本文の版式・字数・字型など、完全に延祐版そのものと等しい。わずかに、版心下部の刻工名が省かれ、代りに時として「子寧刊」「蔣」「蔣寧刊」などの刊行者名を刻する。ゆえに、本書は延祐版の模刻版にはかならない。したがって、右の5以下9までは最初からなかつたものであろう。本文の補写の部分には明らかに明藏本によつている箇所さえみられる。ただ、本書の各巻末には、延祐版にみられぬ助縁者の附刻が比較的多く存する。主要なもののみを示すと、

慶元路大慈禪寺住持比丘宗迪施財刊此一卷（巻八・九）

應夢名山雪竇禪寺住持比丘求懷助錢參伯貫文（巻十）

慶元路天寧禪寺住持比丘若信助錢陸拾貫（巻十一）

昌國州吉祥禪寺住持比丘德奇施錢刊此一卷（巻十二）

慶元路前天寧禪寺住持比丘唯一助錢式拾貫文（巻十三）

台州天寧禪寺住持比丘廣慧助錢□□□□（巻十四）

大梅山保福禪寺住持比丘智昌助錢式伯伍拾貫文（巻十五）

などのほか數十名の僧名が読みとれ、元代末期の禪宗史上の一資料を提供している。

資料といえば、本書の欄外には中世の注記書込みが存す

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

るが、特に『宝林伝』からの引文が目をひく。とりわけ、卷五の慧能の法嗣中の曹溪令船禪師章の欄外に

宝林伝云、本名行韜、能大師父名、行韜遂改

とあるものは從来未知の逸文であり、これも禪宗史上的貴重な資料となるものである。

以上のごとく、本書は湖州道場山と同じ浙江省明州の在城蒋子寧なる人が近隣諸山の施財を得て、太白山（天童山）祇桓庵において延祐本を模刻して流布せしめたものである。あたかも、延祐本が世に行なわれて半世紀、いがに『景德』が流行したかを物語るものである。現在、大東急文庫以外に本版の所在は知られぬが、四部叢刊本中にその一部分が含まれることは次章で注意しよう。なお、本書はかつて洛南の東寺に藏するところであった。本書第十五冊裏表紙裏の識語がこれを述べる。

是比伝燈錄三十卷者、湖州鉄觀音院僧洪辰所撰、而以為禪錄、故非我宗所用矣。雖然當院祖師果寶法印、於所制作之開心鈔中往々引之、以為証矣。求放一日謂於我曰、於當院經藏中不可無是書、予曾求得是錄、而秘藏年尚矣、願請入藏以附盛開心鈔。予聞之欣然諾。故寄附之趣、以令是書到無窮。云爾。

寛文十二年夏十六日

權大僧都果快

ちなみに、『開心鈔』の著者果宝（一三〇六～六二）とは、

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

『大日經演奧鈔』五十六卷をはじめとする幾多の著述を遺し、『本朝高僧伝』卷十七に伝をとどめる中世真言宗の頑学であり、『開心鈔』卷上には禪宗史上的注目すべき資料を提供している。

- (1) 川瀬一馬『五山版の研究』上巻 P 106 参照。
(2) 同、P 370 参照。

五、四部叢刊所収本

『四部叢刊』三篇子部に、常熟翟氏鉄琴銅劍樓所蔵の『景德傳』が影印収録されたのは、民国二十四年（一九三五～六）のことであるが、以後、本書は陳垣氏の『中国仏教史籍概論』において闡説され、前述の台灣本では校合本の筆頭に用いるなど、宋版の『景德』として、にわかに注目されるにいたつた。

まず、本書の構成順序は次のとおりである。

一、楊億の序 二、西來年表

三、本文（卷一～三十一） 四、跋（民国二十四年）

ところで、本書は原刊記や年記をもたないのみならず、先の『中華大藏經』本と同じく混合版であるため、不用意

に用いることは許されぬ。ittai、本書の影印時の跋文は、本書が宋版三本の合成であることを注記する。すなわち、本書の版別を、〔一〕全三十卷中の大部分たる一十五卷と〔二〕卷十八と十九の各一部分、〔三〕卷十～十二、の三種であるとなす。しかるに一方、光緒三年（一八七七）刊行の『鉄琴銅劍樓藏本書目』によれば、

景德傳燈錄 宋刊 鈔補本

每半葉十三行、行廿一至廿五字不等。卷二卷三闕、鈔補。第十至十二闕卷、以別一宋本補。每半葉十五行、行廿八字。

書中敬鏡貞等字減筆。
書首有辨釋樓氏記。

とみえる。なるほど、本書の卷一と卷三は、よくみると筆写本の影印らしい。そして、毎葉の字数・行数・版心などの形式が卷一とほぼ一致するが、卷一の最後の一紙のみは例外である。しかるに、この卷一の版式は本書中独特であり、卷十～十二の部分はもとより、他の卷とも一致しない。つまり異版である。さらにまた、先述の跋文が注記するごとく、卷十八中には別の異版が混在するが、卷十九にはこれが見当らぬ。

いま、問題が複雑するので、本書を異版別に整理し、その版式等の特徴を示そう。

一 序・西來年表・卷一

毎半葉十三行、毎行二十三ヶ二十六字、左右双辺、有界、版心「伝第（卷数）〔丁数〕」

(二) 卷二ヶ三（補写） 版式は右に同じ

卷四ヶ九、卷十三ヶ三十（但し卷十八は四を除く部分）

十三行、二十一ヶ二十三字、左右双辺、有界、版心、細黒口、「伝燈錄（卷数）〔丁数〕（刻工名）」

卷十八（第二ヶ八紙、第十一ヶ十九紙、の部分）

十三行、二十二ヶ二十六字、左右双辺、有界、版心、天地双行、「（刻字数）伝第十八〔丁数〕（刻工名）」

(五) 卷十ヶ十三

十五行、二十八ヶ三十字、左右双辺、有界、版心、細黒口、「伝燈錄（卷数）〔丁数〕（刻工名）」

以上により明らかなるごとく、本書は実に五種の混合版なることが知られる。したがって、卷十八のごとく異版が相互に入り組む部分、すなわち、原本の第八紙と九紙、第十紙と十一紙、第十九紙と二十紙の三カ所には、それぞれ本文の重複がみられる。反対に、卷九の末尾（朗州東邑懷政禪師章の途中以下）と、卷十の首部（目録の最初より幽州盤山宝積禪師法嗣云々まで）は、欠紙のままで影印されている。かくして、右五種の異版の新旧、および刊行時期をあら

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

ためて考えてみよう。まず、卷頭の楊億の序と西来年表であるが、前述の延祐本のそれと酷似するものの、細部で版式を異なる。卷一についても同じである。すなわち、本書と延祐本の卷一とは版心を異にし、紙数も前者は十三紙、後者は十四紙である。ところが、この一紙の相違は、後者の第十四紙目のわずか一行半あまりを前者では第十三紙末尾に繰り入れているためであり、第十二紙までは両者は完全に一致する。また一方、民国十一年（一九二二）刊行の『鐵琴銅劍樓宋金元本書影』は、その第六冊にこの四部本『景德』の卷一の第一紙半葉を原寸大に影印するが、その匡郭内のサイズもまさしく延祐版の原本に一致する。これらの事実からして、四部本の卷一は、楊億の序文等をも含めて、延祐本を底本とする改版とみられるべきものである。あるいは、延祐版の模刻である至正版の改版であるかも知れぬ。いずれにせよ、元版以後の版には相違ない。

次に、卷二ヶ三の補写の部分は、行数・字数・配列等すべて延祐版に一致する。異なるのは、版心に刻字数と刻工名とが省かれる点のみであるが、これはないのが当然であろう。この部分も至正版による補写とも考えられぬではないが、両版の流布度から推して、いまは延祐版による忠実

な補写とみておきたい。なお、この部分に宋版に関説する割注が存することは、本書を用いる上で最も注意しなければならぬ点である。

次に、本書の大部分をしめる卷四十九、卷十三～三十の部分は、宋版であるとしても、いつごろの版であろうか。書誌学界の泰斗、長沢規矩也博士によれば、無刊記の宋版の刊行年次決定の第一は刻工調査にあるといふ。⁽¹⁾ いまこれにしたがつて、該当の巻に存する刻工名を検索し、刻工別に巻次を示すと次のとくとなる。

章立（卷四十九） 董易（四十九、十三～五、十七、十九～二十三、二十五） 董（九、十四～五、二十一～二十二、二十四～五、二十七～九） 易（十九） 章彦（四十九、十三～四、十六～八、二十一～二十三） 章（六十九、十三～四、十六～二十

八、三十） 吳莫（五～八） 徐義（十三、十七、十九） 徐（十三、十五～二十一、二十三、二十五～七）

以上の九名による本文の刻字を比較対照の結果、「董」と「易」は「董易」と同一名、「徐」も「徐義」にほかならぬことがわかる。残る六名中、誰の略称か判然とせぬ「章」を除外した、章立・董易・章彦・吳莫・徐義の五名について、いま、博士の労作「宋刊本刻工名表初稿」⁽²⁾について、

徵し、他の刊本における存否を検索すると、

(一) 静嘉堂文庫所蔵『新唐書』（嘉祐刊南宋修本）の刻工名

に一致する者 章中、董易、章彦

(二) 同、『史記』（淳熙刊修本） 章中

(三) 同、『国語』（宋刊明修本） 徐義

(四) 見当らぬ者 章立、吳莫

のごとき結果がえられる。(三)は年代不明、(四)は他に見当らぬ刻工名のため、それぞれ対象外となる。問題は(一)の「章中」で、嘉祐と淳熙という一世紀以上をへだたる刊本二種に存する。しかし、董易と章彦とは(一)のみにしかみられぬから、畢竟、(一)だけが対象として残ることとなる。ちなみに、董易と章彦の『景德』中の頻度の高さは右に掲げたとおりである。

静嘉堂文庫蔵の『新唐書』は、嘉祐年間（一〇五六～六三）の刊本といえば、同書の最古版であろう。いま、この書の刻工と三名が一致する事実は、当面の『景德』もまた当時の刊行なることを示唆するものではあるまいか。もとより、万巻の書中には偶然の一一致もありうる。しかし、右の推定を助けるものに、前述の四部叢刊の跋文が注記する闕筆文字の存在がある。いうまでもなく、闕筆文字の存在も

宋代の刊行年次を知る有力な資料である。前記の跋文は当面の宋版の部分の闕筆として、「玄・弘・朗・殷・匡・敬・警・擎・驚・鏡・竟・戌」等の文字を掲げる。原文に徴すると、たしかにこれらの文字は闕筆される。ところで、「玄・弘・朗」は「玄・孔・老」の音通、「殷」は宋帝太祖の、「匡」より「竟」までは太祖と太宗の避諱文字である。「戌」は不詳であるが、上記の闕筆は、おおむね本書の刊行が宋代初期なることを証するものである。かくして、この宋版の部分は、嘉祐年間ごろの刊行と認めてよいであろう。

嘉祐の年号は、前掲の東禅寺本の初刊たる元豐三年（一〇八〇）に先だつこと二十年ほども古い。ゆえに、右の推定が誤らなければ、銅劍樓所蔵の該書は現存する『景德』中、最古の宋槧本にほかならぬ。あたかも、該書中には、音釈および異本に関する注記をもたぬことを特徴とする。古版なることの一証であろう。あるいは、音釈不存とされる開元寺版大藏經本のもとすく宋槧であるかも知れない。さて、次に四部本の卷十一の部分はどうか。これも先に掲げた銅劍樓の『目録』に、「別の一宋本を以て補す」とあり、文中の闕筆文字を注記する。さらに、これを

承ける四部本の跋文は、この部分の闕筆文字として、「玄・弘・朗・貞・儻・徵・署・堅・戌・樹」などを掲げる。このうち、「貞・儻・徵」は宋朝第四代仁宗の、「署」以下は第五代英宗の避諱であるから、英宗の在位（一〇六三～六七）以後の刊行であろう。本部分の刻工名は十六名を数えるが、先の「宋刊本刻工名表初稿」に徴しても特徴をみいだし難く、たしかな年代は推定でさない。ただ、本版もまた音釈なく、異本の所在を云わぬなどの点で、北宋期の古版なることは明らかである。

しかるに一方、これと同じ宋槧本が近年まで存在している事実がある。すなわち、光緒二十七年（一九〇一）に浙江錢塘の丁丙氏が、みずからの蔵書目録と解題とを著して刊行した『善本書室藏書志』卷二十二には次の記載が存する。

景德伝燈錄三十卷 宋刊本

按、伝是樓芸精舍宋版書目俱載此書、疑徐帰於汪即紙一帙耳。

此存五至卷九、又十三至十九、又二十三四、凡十四卷。每半葉十五行、毎行二十八九字、不等字画端湛洵、宋槧之佳者。考此書尚有元延祐刊本、首列楊億序、更列紹興壬子鄭跋、紹興四年劉栢後序。此在闕卷之中無從案核也。有越溪草堂一印、天祿琳鄉中亦有此印云無攷。

右の文中、注目すべきは、「毎半葉十五行毎行、二十八九字」なる版式であり、これは当面の四部本卷十～十二の版式にのみ一致する。あたかも、善本書室本は同じ部分を欠くとする。このことは、両者はもともと同一本であつたものが散逸し、そのうちの約半分が善本書室に、一部分が鉄琴銅鏡樓に各所蔵せられたことをすら推定せしめる。とすれば、本宋槧はきわめて数奇な運命をたどる一本といつよい。

最後に、卷十八中の異版はどうであろうか。銅鏡樓の目録は、この部分に注意しない。おそらく、目録の編者の不注意か無視かのいずれかであろう。しかるに、この部分は、実は前章で述べた延祐本の模刻版たる至正版そのものなのである。両者は照合の結果、完全に一致する。殊に、四部本卷十八の第五紙の版心下部に「子寧刊」なる刊記をとどめるのは、至正版が延祐版の刻工名を除去しがり、代りにきわめて稀に刊記を付した数少ない例の一つである。とにかく、この部分は、至正二十五年版が大東急文庫以外に存在が知られる唯一のものとして貴重である。

かくして、四部叢刊所収の『景德』は、実に五種の混合版なることが明らかにせられた。これを古い順に示すと、

- (一) 卷四十九、十三～三十 嘉祐(一〇五六～六三)頃刊
 (二) 卷十～十二 治平四年(一〇六七)以後刊
 (三) 卷二～三 延祐三年(一三一六)版の謄写
 (四) 卷十八(第二～八、十一～十九紙のみ)
 至正二十五年(一三六五)刊

(五) 揚億の序・西來年表・卷一 延祐三年以後刊
 のごとくになる。したがって、今後、本書を用いるには、常に右の版別を考慮すべきであろう。

それにしても、宋版二本を含む五種の『景德』を有する銅鏡樓は驚きに価する。ittai、同樓には、その『宋金元本書影』のみでも、宋本一六〇、金本四、元本一〇六という点数を影印し、清代の四大藏書家の一つと称される瞿鏞のコレクションの質的高さのほどを示す。ちなみに、同じく宋元版の所蔵で名高い江蘇省崑山の伝是樓のごときも、その藏書目によれば、宋版の『景德』を七本、元版に至つては實に二十四本とある。これらの内容と、その後の存否は知る由もないが、これらの中には、われわれの知らぬ異版が存在したことは想像に難くない。

(1) 長沢規矩也『書誌学論考』第三篇、宋元本考、第一章、宋版の形態上の特徴と其鑑別法 参照。

(2) 『書誌学』第二卷第二号

(3) 広文書局刊『書目叢編』所収の影印本による。

(4) 『伝是樓宋元本書目』 (宣統二年一一九一〇一刊、玉簡齋叢書本による。)

六、おわりに

以上、『景德』の宋・元版数種の調査による書誌的概要をのべた。もちろん、宋元版はこれにとどまらぬ。周知のことく、景祐元年（一〇三四）に編せられ同三年の跋をもつ『景德』の節録、『伝燈玉英集』十五巻は、『宋藏遺珍』や『中華大藏經』第一輯に影印されて研究を容易にするが、同書の考察はその本文研究とともに別の機会としたい。また、延祐本の巻末に附録せられる二つの跋文は、紹興二年（一一三三）と四年に別々に書かれ、ともに別箇に再刊された『景德』に付せられたものらしい。殊に、後者を梓行した四明の思鑒禪人は、同時期に『宗門統要集』十巻を重刊する。この人の仕事に対して、南宋の道融撰『叢林盛事』巻下に収める非難の記事については、すでに柳田聖山教授の指摘されるところであるが、目下みられぬ幻の紹興版に対する見解として貴重な資料である。⁽¹⁾

版、本邦いすれかに存するとみられる開元寺版、元版一切
経の大普寧寺版、南北の明藏版等が挙げられよう。また、
古型を保存すると思われる高麗版が駒大には二本あり、こ
の調査報告も他日を期したい。更に、古写本としては、敦
煌本の残巻がレニングラードのアジア民族研究所に存する
とされ、⁽²⁾ 本邦の紫野大徳寺に蔵されるという正和十一年
(一一三一)、開山宗峰妙超自筆本⁽³⁾とともに、その公開の日
を鶴首したい。

ただ、これらの諸本すべての閲覧が望みえぬ現時点において、右の調査報告にもとづき、予想されうる『景德』の異本の系譜を考えてみたい。その一助として、本稿でのべた各版の内容構成の配列を、延祐本を基準にして一覧しておこう。

その他、今後に残される『景德』のテキスト調査の対象としては、まず大藏經類では前述の高野山と東寺の東禪寺

宗・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

宋・元版『景德伝燈錄』の書誌的考察（椎名）

『宋版禪籍調查報告』（『禪文化研究所紀要』五）

小川環樹「レーニングラニードのこと」（「図書」一九六五、一月号）

参照。

(1) 『宋版禅籍調査報告』（小川環樹「」）
 (2) 小川環樹「」
 (3) 参照。
 「新纂禅籍目録」 P 63 b

| | | | |
|---------|--------|--------|---------|
| 8 希渭等の状 | 7 宏智の疏 | 6 鄭昂の跋 | 5 劉栢の後序 |
| 1316 | | 1132 | 1134 |

右表中、西来年表と音釈の存否は、本書の系譜をさぐる大きな要素であろう。もちろん、音釈は時代により異なる場合もあり、からなずしも通時代的ではないが、音釈され

る親字には共通性があり、前代の影響を多分に受けると考
えてよい。かくして、これらに加えて、大藏經の系譜や特
徴、さらに『景德』本文中における割注などを参考にして
次のとき系譜が可能となる。もって、調査報告の結びと
したい。

